

研究報告

大島鎌吉のスポーツ思想に訊く（1） — オリンピアドを祝福するという視点において —

Discussion on Kenkichi OSHIMA's Sports Ideas（1）
： A Viewpoint on the Celebrating of the Olympiad

伴 義孝*

Yoshitaka Ban

1. はじめに

ルポライターの岡邦行が2013年に『大島鎌吉の東京オリンピック』を上梓した。

版元探しは売り込みから始めた。だが、なかなか決まらない。「オーシマケンキチ？ 誰なの？」が現実だった。（あとがき）

1949年生まれで岡が、2009年に拙著『スポーツの人 大島鎌吉』を読み、スポーツを題材にしているのに「東京五輪のことは鮮明に覚えていても大島のことは記憶にない」と恥じ入った。4年間の取材を経て版元を探した反応が上記のとおりである。こうまでも現在の大島鎌吉（1908～1985）は知られていない。なぜなのか。そうであれば人物像を素描しておく必要がある。

明治41年（1908年）11月10日、大島は金沢市に生まれた。そして外来スポーツの黎明期に陸上競技に興じた。中学時代には三段跳で活躍し国内外で頭角を顕す大島は麒麟児と囑望され、戦後は生涯を通じて広義のオリンピック^{注1)}として活動する。1932年五輪ロサンゼルス大会では銅メダル。1934年から毎日新聞社運動部記者となる。1934年には15歳82センチの世界記録を樹立。1936年五輪ベルリン大会では旗手を務め六位だった。このように大島は、世界の激動期に競技経験と記者活動を

ととして世界情勢の現実問題と近代化路線の進捗状況を冷徹に見定めてきた。斯くして同時代人の水準を凌駕する特異経験が大島思想の形成要因になっている。

一方で大島は、日本が返上した1940年五輪東京大会の打開のため、代替えヘルシンキ大会への日本参加に向け環境整備を成し遂げた^{注2)}。大島30歳。折衝のため大島は学生選手団を引率し1939年6月にドイツへ遠征する。だが第二次世界大戦（1939～1945）の勃発に遭遇した。そのまま毎日新聞特派員として駐在し6年間の「死線のドイツ」取材する（大島、1947）。この6年間で契機に始まる大島の生涯に亘ったカール・ディーム（1882～1962）を筆頭とするドイツスポーツとの交流は緊密だった。斯くしてこの「ドイツチャンネル」からの「学び^{注3)}」は日本のその後に大きく影響することになる。しかしこうした大島経由の学びも正當に点検評価されているとはいえない。なぜなのか。

1945年8月1日。ベルリン陥落を見届けた大島が数奇な運命を乗り越え日本へ生還する。

この「死に損ないは、やりたいことは、何でもやってやろう！」とその後の生き方を決めた。（大島、1982、p.176）

大島36歳。決心「やりたいこと」は戦争に

* 関西大学（名誉教授）

Kansai University